

鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第18報 標識ツル類の観察資料 3. (昭和62年度)

安部 直哉^{*1}・田頭 吉一^{*2}・藤村 仁^{*3}

Studies of the Cranes in Izumi, Kagoshima, Japan. 18.
The Observations of Ringed Cranes 3. (1987-88).

Naoya Abe^{*1}, Yoshikazu Tagashira^{*2}, and Hitoshi Fujimura^{*3}.

-
- *1 神奈川県相模原市旭町 22-21, Asahi-cho 22-21, Sagamihara-shi,
Kanagawa-ken.
*2 鹿児島県川内市国分寺町 4162, Kokubunji-cho 4162, Sendai-shi,
Kagoshima-ken.
*3 東京都中野区中野 6-8-15, Nakano 6-8-15, Nakano-ku, Tokyo.

序

本報では、1987—88年（昭和62年度）の「出水平野におけるツル類の基礎調査」中に得た標識鳥の観察結果をまとめた。ここ数年間の標識ツル類に関する観察によって、たとえば、標識鳥の生残状況、生後初めて番になる年齢、番関係の持続、変更、離婚、初繁殖年齢など生態学的な知見もいくらか得られているが、「標識ツル類の観察資料」という本報の表題が示すように、前2報（安部ほか、1987, 1988）と同様に本報でも、標識ツル類の観察資料を記すにとどめた。上述のような生態学的な知見は、さらに調査を続けて、後に報告する計画である。

情報を提供して下さった協同調査者の方々、標識実施者である山階鳥類研究所・標識研究室の方々にお礼し上げる。

調 査 方 法

調査期間 昭和62年度の定期調査は、(1)1987年10月31日—11月8日、(2)同年11月30日—12月7日、(3)1988年1月10—16日、(4)同年2月13—19日、(5)同年3月16—21日に実施した。これらの調査期間に、総数調査、分散状況調査などと併行して標識鳥の探索、家族構成調査を行った。さらに、10月中旬から12月上旬には、定期調査期以外にも共著者の田頭が標識鳥の探索を行った。

用語解説 本報で用いた幼鳥、成鳥の規定、標識脚環の表記法などは前報（安部・藤村、1988）と同じなので、本報では省略した。

標識個体の年齢 各個体の標識時の幼成、家族構成などは、標識実施者である山階鳥類研究所・標識室の昭和58—60, 62年度報告書（1984, 1985, 1986, 1988）に発表されている。標識時に幼鳥であった個体のその後の年齢は明らかであるが、標識時に成鳥であった個体の年齢は不明である。本報では、各個体の標識年月と標識時の幼成別を上述の山階鳥類研究所・標識室の年度報告から引用して、年齢を示す参考記述とした——各個体の標識略号の次に、たとえば、「1986年1月に出水で標識され、標識時に幼鳥であった」場合は、1986年1月標・幼、と略記した。

調 査 結 果

1987年1月以前に標識された個体 この項の個体は総て、1987—1988年期の調査期には満1歳以上のいわゆる成鳥である。

ナベヅル

橙色2（1979年12月標・幼） 1988年1月11日、西干拓地でこの個体と考えられる鳥を観察したが、番号を正確に読みとれなかった（この個体の橙色脚環は右脚に付いていた。近年、橙色脚環を付けているナベヅルで観察されている個体は、橙色2と10と14の3羽であり、10と14番は橙色脚環が左脚に、2番は右脚に付いている）。この個体は幼鳥1羽を連れた3羽の家族であった。

橙色14（1983年1月標・成） 1988年1月14, 15日に西干拓地で観察されただけで、しかも、群で採食しており、家族構成を明らかにできなかった。

黄色J09（1984年1月標・成） 前年と同様、J36と番で、幼鳥1羽を連れた3羽の家族。

黄色J36（1985年1月標・成） J09と番の3羽の家族。

黄色J21（1984年1月標・成） 脚環のない個体と番で、幼鳥1羽を連れた3羽の家族。分散調査中、武本地区の小原上に観察された。この地域を日中の定住場所としていたと推察され、1988年1月13日の18時には、米ノ津川の川原に降りていた合計97羽のナベヅルのなかに入っていた。

黄色 J 23 (1984年 3 月標・成) 1987年12月, 1988年 2 月の調査中に東干拓地と給餌地区で観察され, 番の 2 羽の家族。

黄色 J 24 (1984年11月標・成) 1987年11月調査には給餌地区と東干拓地で観察され, 1988年 2 月には分散調査地域の旧飛行場地区内, 高尾野町御岳で観察された。脚環のない個体と番で, 幼鳥 2 羽を連れた 4 羽の家族。

黄色 J 25 (1984年12月標・幼) J 25は, 前冬の1986年11月29日に韓国金浦郡柿岩里で観察され, 1986—87年冬期には出水では観察されなかったもので, 前冬は韓国で越冬した可能性のある個体である。今冬期は, 1987年 12 月 2 日に給餌地区で初めて観察された。以後, 給餌地区で大群内に何度か観察されたが, 家族構成は不明。

黄色 J 26 (1985年 1 月標・幼) 1987年12月には給餌地区で, 1988年 2 月には蕨島分校わきの農耕地で群内に観察された。家族構成は不明。

黄色 J 28 (1985年 1 月標・成) 1988年 1 月と 2 月の調査中, 分散調査地域の野田川流域地区内, 野田川中流左岸の農耕地で観察された。しかし, 群内にいて, 家族構成は不明。

黄色 J 30 (1985年 1 月標・成) 1987年12月, 1988年 1 月と 3 月の調査中に, いずれも給餌地区で群内に観察された。家族構成は不明。

黄色 J 37 (1985年 1 月標・幼) 1988年 3 月調査中に, 西干拓地と給餌地区で群内に観察された。家族構成は不明。

黄色 J 40, J 41 (1985年 1 月標・成) 1985年 1 月に J 40 と J 41 が番, J 42 と J 43 はその子供として標識されている。

1987年11月 5 日に給餌地区で初めて観察され, J 40 と J 41 は番で幼鳥 2 羽を連れた 4 羽の家族であった。越冬期間中, 日中は主として西干拓地で生活していた。

黄色 J 42 (1985年 1 月標・幼) 1987年12月15日に給餌地区で 1 回観察されただけで, 家族構成は不明。

黄色 J 43 (1985年 1 月標・幼) 1987年10月28日に東干拓地で初めて観察され, 以後, 東干拓地, 西干拓地, 給餌地区などで観察された。いずれも, 群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 44 (1985年 1 月標・成) 1988年 1 月12日に西干拓で初めて観察され, この時は小群内にいて家族構成を明らかにできなかった。同年 2 月19日には, 蕨島の南斜面にある狭い段々畑で採食後, 蕨島分校わきの農耕地に降りた。脚環のない個体と番で, 幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族であった。J 44 の虹彩は, 今期も黄色であった。

黄色 J 45 (1985年 1 月標・成) 1987年12月, 1988年 2 月調査中に給餌地区と西干拓地で群内に観察された。家族構成は明らかでないが, 1988年 2 月14日の観察では, 子供を連れていないことは確実であった。

黄色 J 50 (1985年 3 月標・成) 前冬と同様に古浜内の一画を定住地としていた。幼鳥 2 羽を連れた 4 羽の家族で, J 50 の番の相手の雄は, やはり前冬と同様に気が強く, 他のナベヅルに対し定住場所をよく守っていた。

白色 A 50 (1985年 7 月, ソ連で標識・成) 1987年11月, 12月, 1988年 1 月調査中に給餌地区で観察されたが, 群内にいて家族構成は不明。

白色 A 51 (1985年 7 月, ソ連で標識・成) この個体は, 1985—86年期, 1986—87年期には出水で越冬したが, 1987—88年期は山口県熊毛町八代のナベヅル渡来地で越冬した。

1988年 2 月21日, 短時間の観察では, 番になっているとは思われなかった。

白色 A 53 (1985年 7 月, ソ連で標識・成) 1987年11月, 12月調査中に給餌地区で群内に観察された。家族構成は不明。

黄色 J 52, J 53 (1986年 1 月標・成) J 52 と J 53 は番, 幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族。西干拓地の西部の農耕地を定住場所としていた。J 52 が雄, J 53 が雌であろう。

黄色 J 56 (1986年 1 月標・幼) 1987年11月調査以後, 東干拓地と給餌地区の群内によく観察された。この個体の1986—87年期の特異な羽毛と反り上った右足の指については前 2 報(安部ほか, 1987, 1988)で述べた。1987年11月には, 体羽の大部分は成鳥羽に換羽していたが, 雨覆の一部と風切の一部は褐色の幼羽であった。また, 右足の指は

反り上ったままであった。群内にいることが多く、家族構成は不明。

黄色 J 57 (1986年 1 月標・成) 1987年11月と12月調査中に給餌地区で採食中の群内に観察されたが、家族構成は不明。

黄色 J 58 (1986年 1 月標・幼) 1987年11月, 12月, 1988年 1 月, 2 月調査中に給餌地区と東干拓地で観察された。しかし, 毎回, 群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 59 (1986年 1 月標・成) 今冬も脚環のない個体と番で, 幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族。J 59は, 番の相手より大きいので, 雄であろう。東干拓地と西干拓地で観察されたが, 西干拓地内の西部の農耕地を主な定住場所としていた。

J 59の番の相手として1986年 1 月に標識された J 60は今期も観察されなかった。

黄色 J 61 (1985年11月, 福岡県で保護され, 同月に出水で標識放鳥・成) 1987年11月調査中に 1 回, 西干拓地の群内に観察されただけで, 家族構成は不明。なお, この個体の虹彩は, 前冬と同様, 暗橙赤色であった。

黄色 J 62 (1986年 1 月標・幼) 著者らは, 前冬期 (1986—87年期) にはこの個体を観察できなかった。この個体が前冬期に出水あるいは日本国内の他の地方で観察された, という情報はない。しかし, 今冬期には, 1988年 2 月18日に西干拓地で 1 回だけであるが観察された。しかも, J 59と J 60の番の子供である J 62と J 63が, あたかも番の 2 羽であるかのように一緒に行動していた。

黄色 J 63 (1986年 1 月標・幼) 1987年11月, 1988年 2 月, 3 月調査中に給餌地区と西干拓地で観察された。1988年 2 月15日に給餌地区で採食する群内に観察された時には, その近くに J 62を見つけ出せなかったが, 2 月18日の状況は J 62の項に記した通りである。同年 3 月に給餌地区の群内に観察された際にも, この群内に J 62を捜したが発見されなかった。

黄色 J 64, J 65 (1986年 1 月標・成) 今冬期も J 64と J 65は番で, 幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族。主として西干拓地を定住場所としていた。

黄色 J 69 (1986年 2 月標・幼) 今冬期, 東干拓地と給餌地区で何度も観察された。いずれも群内で家族構成は不明。

黄色 J 79 (1986年 2 月標・幼) 1987年12月調査中に給餌地区で 1 回観察されただけで, 家族構成は不明。

黄色 J 72 (1986年12月標・幼) 1987年12月, 1988年 1 月, 3 月調査中に給餌地区で観察された。番になっているとは思われなかった。この個体は1986年生まれの満 1 歳鳥であるが, 1988年 1 月には, 背面に褐色の幼羽を多く残していた。右脚の青色補助環は落ち, 金属脚環の付いている関節部が脹れていた。

黄色 J 73 (1987年 1 月標・幼) 1987年12月調査中には給餌地区で観察された。1988年 2 月13日には, 今釜の農耕地で幼鳥 1 羽を含む16羽の群内に観察された。家族構成は不明。なお, この個体は, 1986年12月27日に今釜で保護され, 保護飼育後の1987年 1 月12日に標識放鳥されている。

黄色 J 74 (1987年 1 月標・成) 1987年12月, 1988年 2 月調査中, 野田川流域地区内の野田川中流左岸の農耕地で観察された。1987年12月 7 日には, 番と幼鳥 1 羽の 3 羽の家族かとも思われる状況が, また1988年 2 月13日には番の 2 羽の家族かと思われる状況が見られた。同年 2 月15日には, 幼鳥 1 羽を含む15羽の群内に観察され, 家族構成は明らかにできなかった。なお, この個体は前冬期も野田川中流左岸の農耕地の群内に観察されている。

黄色 J 75 (1987年 1 月標・幼) 1987年11月に給餌地区で 1 回観察されただけで, 家族構成は不明。

黄色 J 76 (1987年 1 月標・幼) 今冬期中, 東干拓地, 西干拓地, 給餌地区で数回観察された。群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 80, J 81 (1987年 1 月標・成) J 80と J 81は, 今冬期中, 東干拓地, 西干拓地, 給餌地区で観察され, J 80と J 81は番で子供を連れていなかった。西干拓地を主な定住場所としていた。

黄色 J 82 (1987年 1 月標・幼) 1988年 1 月, 2 月調査中, 給餌地区と西干拓地で群内に観察され, 家族構成は不明。J 82と J 83は, J 80, 81の番の子供である。J 83は今冬期中, 観察されなかった。

黄色 J 86, J 87 (1987年 1 月標・成) 前冬期と同様に J 86と J 87は番で、幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族であった。主に西干拓地で観察された。

黄色 J 88 (1987年 1 月標・幼) 給餌地区と西干拓地でよく観察されたが、いずれも群内で家族構成は不明。

黄色 J 90 (1987年 1 月標・幼) 給餌地区でよく観察されたが、群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 92 (1987年 1 月標・幼) 1987年12月調査中、給餌地区で群内に観察されただけで、家族構成は不明。

黄色 J 93 (1987年 1 月標・幼) 1988年 1 月, 2 月調査中、給餌地区で群内に観察された。家族構成は不明。

黄色 J 94 (1987年 1 月標・成) 今冬期中、給餌地区、西干拓地で何度も観察されたが、群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 95 (1987年 1 月標・成) 1988年 1 月, 2 月, 3 月調査中、給餌地区、西干拓地で群内に観察され、家族構成は不明。

黄色 J 96 (1987年 1 月標・成) 1988年 3 月調査中に給餌地区で群内に観察され、家族構成は不明。

黄色 J 97 (1987年 1 月標・成) 今冬期中、東干拓地、西干拓地、給餌地区で群内によく観察された。家族構成は不明。

黄色 J 98 (1987年 1 月標・成) 1987年11月調査中は東干拓地で、1988年 1 月調査中には西干拓地で、群内に観察され、家族構成は不明。

黄色 J 99 (1987年 1 月標・成) 今冬期中、東干拓地と給餌地区で何度も観察された。いずれも群内にいて、家族構成は不明。この個体は気が強く、給餌地区で採食中、近くにいるナベヅルにたびたび突っ掛っていた。

クロツル

黄色 J 84 (1987年 1 月標・成) 1988年 1 月, 2 月調査中に給餌地区で観察された。前冬期と同様にナベヅルと番で、幼鳥 2 羽を連れた 4 羽の家族であった。

マナヅル

橙色 15 (1983年 1 月標・成) 1987年12月 3 日に給餌地区で採食中のこの個体を 1 回観察しただけであった。以後、橙色脚環付の個体に特に注意して探索したが発見出来ず、家族構成は不明。

黄色 J 04, J 05 (1984年 1 月標・成) 標識時と同じく J 04と J 05は番であったが、今冬期は幼鳥を連れていなかった。西干拓地内の西側の農耕地を定住場所としていた。

黄色 J 15 (1984年 1 月標・成) J 15と J 14は番で標識され、前冬期まで番であったが、今冬期には J 14は観察されなかった。J 15は、1987年12月 3 日に、今釜地区で初めて観察され、脚環のない個体と番で、幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族であった。以後、毎月の調査中にこの家族は今釜の同じ場所に定住していた。

前冬期には J 14と J 15の番は西干拓地と給餌地区で観察され、今釜では全く観察されていない。J 15は、J 14に比較して、体が小形なので雌と推定されていた。今冬期の番の相手は、J 15より大形であった。

黄色 J 17 (1984年 1 月標・成) 前報(安部・藤村, 1987)でも少しふれたように、J 17は、1987年には中国黒竜江省ザロン保護区の近くで繁殖し、その 1 羽の幼鳥に標識された。1987年12月 3 日、J 17の例年の定住場所である唐笠木の農耕地に、幼鳥 1 羽を連れた 3 羽の家族を初めて観察した。その幼鳥の左脚には、地色が赤色で、白抜きの番号 61 が縦に印されているよく目立つ色脚環が付けられている。

黄色 J 19 (1984年 1 月標・幼) 1987年12月 3 日に給餌地区で採食する J 19を今期初めて観察した。採食後、この個体の他に 6 羽の成鳥羽の個体がまとまっていたが、近くに幼鳥はいなかったので、幼鳥を連れていないことは確かであった。1988年 1 月12日には、給餌地区内で、明らかに番を形成しているとみなせる状態で観察された。J 19は、体の大きさから雌と思われる。

なお、1988年 1 月には、J 19の左脚に付いている金属脚環は、合せ部分の幅がかなり開いており、近々に落ちるで

あろうと推察された。

黄色 J 32 (1985年 1 月標・成) J 32の番は、前冬期には給餌地区の主に西側と西干拓地の農耕地で観察された。しかし今冬期には、前冬期と同じ地域では観察されず、1988年 2 月14日に、西干拓地でやっと発見した。幼鳥 1 羽を連れて 3 羽の家族と思われる状態で採食していたが、観察されたのはこの日だけで、家族構成は明らかでない。

黄色 J 33 (1985年 1 月標・幼) J 33は脚環のない個体と番で、幼鳥を連れていなかった。

1987年12月 2 日に初めて給餌地区で観察され、同年 1 月にも給餌地区内で観察された。

黄色 O 60 (1984年 7 月, ソ連で標識・幼) 1988年 1 月14日と 2 月15日に給餌地区で採食する群内に観察されただけで、家族構成は不明。

白色 A 18, A 19 (1985年 7 月, ソ連で標識・成) 1987年12月 3 日に A 18と A 19の番も初めて観察された。幼鳥を連れていなかった。以後、1988年 1 月, 2 月調査中、給餌地区でよく観察された。

黄色 J 54, J 55 (1986年 1 月標・成) J 54と J 55は番で、2 羽の幼鳥を連れて 4 羽の家族。西干拓地内の西部から蕨島分校わきの農耕地に定住していた。

黄色 J 77, J 78 (1987年 1 月標・成) 番として標識された J 77と J 78の探索に努めたが、1988年 2 月調査中に初めて見つかり、2 月17, 18, 19日に給餌地区、西干拓地で観察された。幼鳥は連れていなかった。

1987年の繁殖期と1987年秋季以後に標識された個体

ナベヅル

黄色 K 1 (この個体は、1987年の春季に繁殖地に渡らずに留まっていた幼鳥。1987年 4 月19日に鶴監視員又野末春氏によって捕獲され、保護飼育されて越冬し、同年11月 9 日に標識放鳥された) 1987年12月, 1988年 1 月, 2 月, 3 月調査中、西干拓地と給餌地区で採食する群内に何度も観察された。

黄色 K 2 (1987年12月, 成。又野氏により保護、標識放鳥された) 1988年 3 月18日, 給餌地区の群内で観察されたのみで、家族構成は不明。

黄色 K 3 (1988年 1 月標・成) 1988年 3 月18日に給餌地区の群内で観察されたのみで、家族構成は不明。

黄色 K 4 (1988年 1 月標・成) 1988年 2 月13日と15日には、国道 3 号線の北側、野田川岸に近い農耕地で、2 月18日には給餌地区内の群内に入っていた。

黄色 K 5, K 6, K 7 (1988年 1 月標。K 5と K 6は番, K 7はその幼鳥) 1988年 2 月調査中、西干拓地、蕨島分校わきの農耕地でこの 3 羽の家族が観察された。K 5は K 6より大形で、雄と思われた。

黄色 K 8, K 9, K 10, K 11 (1988年 1 月標。K 8と K 9は番, K 10と K 11はその幼鳥) 1988年 2 月調査中、西干拓地、蕨島分校わきの農耕地でこの 4 羽の家族が観察された。

マナヅル

白色 A 54, A 55 (1987年の繁殖期にソ連で標識された同腹の幼鳥) A 54と A 55は、脚環のない番の幼鳥で、4 羽の家族。今冬期中、古浜とその南側の農耕地を定住場所として生活していた。

赤色 61 (1988年 6 月・幼, 中国で標識) この鳥については、マナヅル黄色 J 17の項に記した。

黄色 M 1 (1988年 1 月標・成) M 2 (1988年 1 月標・幼) 1988年 2 月調査中に西干拓地で観察され、M 1は脚環のない個体と番で、その 2 羽の子供のうち 1 羽が M 2であった。

黄色 M 3 (1988年 1 月標・幼) 1988年 2 月調査中に蕨島分校のわきの農耕地で観察され、脚環のない番と脚環のない幼鳥 1 羽と一緒に(この個体だけ標識されている)、4 羽の家族と思われた。

黄色 M 4 (1988年 1 月標・幼) 1988年 2 月調査中、給餌地区で採食群内に観察されたが、家族構成は不明。

結

び

序文でふれたように、本報では標識個体の観察資料を略記するにとどめたが、本文中で「群内にいて、家族構成は不明」とした個体のうち、成鳥羽になっている個体の多くは、まだ番になっていない若鳥と推察される。出水のツル類の個体群動態を研究する上で不可欠の知見が、標識個体の継続調査で得られるに違いない。標識ツル類の調査成果は、野外識別用色脚環の有効期間と標識個体の探索・観察いかに掛っている。「出水のツル類の基礎調査」では、標識個体の探索や観察は調査項目に入っていないので、十分な時間をこの調査に当てられないから、標識個体の見落としもあるかもしれない。前報と本報で記したように、標識脚環がすでに落ちている個体があり、憂慮される。

文

献

- 安部直哉・内田康夫・藤村 仁. 1987. 鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第3報. 標識ツル類の観察資料 1. 自然教育園報告18:33—40.
- 安部直哉・藤村 仁. 1988. 同上 第10報. 標識ツル類の観察資料 2. 同上報告, 19:53—60.
- 山階鳥類研究所・標識研究室. 1984. 昭和58年度報告. 221—224.
- . 1985. 昭和59年度報告. 200—206.
- . 1986. 昭和60年度報告. 156—163.
- . 1988. 昭和62年度報告. 70—74.